

2005 年度 森村・川村ゼミ議事録

5月18日分

記入者: 武道良子

司会者: 深井麻希子

文献: 「理念としてのバウハウス」利光 功(『バウハウスとその周辺2』より)

発表グループ

A(藤村・鯨井)

B(山田・柳瀬)

議題

1. グループA 空間と身体とのかかわりについて
2. グループB 日常生活にアートは溶け込んでいるか、どのような点でそう感じるか

両議題に対するグループの考察

A空間は人間のためにある。人間が光や音を操作するし、人間がいるからこそ空間がある意味がある。人間にとっても生きる場としての空間がないと困る。

Bそれがアートになりえるかどうかという立場からみるとこれまでは舞台上であるからこそアートであったが、今では人間が空間との新しい関係を作ることがアートといえるのではないか。見せ方の工夫ではなく、空間をどう活かすのかということを考えてバウハウスが空間との新しい関係を作ったことと、赤瀬川原平が路上に出ることで新しい関係を作ったということは、根本的には同じと言える。

議論の展開

・シュレンマーの劇場案は劇場でなければならないのか。現代のパフォーマーは外へ飛び出てゆく。見るもの/見られるものの関係を考えようとしている。

《劇場空間の新しさ≠パフォーマンスの新しさ》

——劇場と外では身体と空間の関係性が変わるのか、変わらないのか？

上疑問に対するAの見解

新しい関係を作ろうとした点では同じ。ただ、路上が舞台として認識されるかされないか。見る/見られるではなくて全てを巻き込んだものが空間で、アートとしてなりうる。ハコのあるなしは関係ない。その環境を設定しないことは、反発のもう一段階進んだ状態なのではないだろうか。

すごく根本的な部分では変わらない。しかし見たい人だけが集まる劇場と、見たくなくても目撃してしまう路上とは異なるし、照明や音楽に自然が介入することで、劇場と同じよ

うにはできない。

——これまでの議論に対しグループBはどうか。空間、身体、

B 見たい人だけがくる劇場と通りすがりの人が見る路上はやはり異なる。舞台芸術で日常というものを取り入れたが、それはほんとうに日常だったのか。現代になるにつれて、もっとリアルな日常に飛び出してきているのではないか。

・

アートとして考えたときのハコの必要性

身体動作と空間の問題

それらをどう解釈していくかという意味の問題

関係性の変容があるのでは。

・日常を演じる≠日常の中で演じる

・両者にとって“日常“のもつ意味が違う。

劇場でもパブニングやパフォーマンスアートは出来るが、そこに観客にお金を払ってもらって呼ぶということ、が決定的に違う。

・路上と舞台、ステージの区切り？Ex、真夏の夜の夢

——議論は 見る/見られる の関係へ

・ 舞台という認識は誰がするのか。役者にとってはまり問題ではないかもしれない。

Ex、寺山修二の路上劇

パフォーマンスアートは見る/見られるという関係を、巻き込むことによって破壊する。見る側としていたのにもかかわらず、見られる立場へと変わってしまう。見る/見られるという関係が演劇を縛っているのだ。

・ なぜ見る/見られるという関係を破壊したいのか。固定観念や価値観の変換を常に必要としているわけではないけれども、あったらおもしろい。

・ 演じている側にとっては全てステージになってしまう。場所はあまり関係ない。

・ 見る側はハコを求めている。ハコは非日常であり、その中に入ることも非日常。

・ 見せる側としては観客を巻き込んで一体になりたいと思っている。外に行くことにより見出せるのではないか。

記入者の考察

やはりハコの中でやるということは、その内容がなんであれアートとして保証されているところが我々の意識の中にはある。それに対して日常の生活の中で行うということは、見る側の意識も異なるし、またハコの外で行うということ自体が意味を持ってくる。日常の中で行っていてもそれは非日常になってしまう。それは我々がハコを求めて、その非日常の空間を楽しむということとは異なっている。

日常とは切り離された場所(美術館や劇場)で楽しむアートと、日常という言葉をライフに

言い換えられるのならライフの中で楽しむアートとの間には何か隔たりがあるように感じた。それは路上でのパフォーマンスアートがあれほどのインパクトを人に与える要因でもあるのだ。その差異は行為の違いなのかもしれない。ライフつまり生活の中で楽しむアートは自分自身が見つかるものだ。それに対し、前者の方は提示されている。どちらがよりアートの本質に近いとかそういう話はおいて、その二つは異なる存在であり、そしてその二つともが私たちには必要な存在だと感じた。